

蒲生さんの死を悼む

池 田 一 新(政経学部長)

あらゆる意味で先輩の蒲生さんが急逝されて既に6カ月経ったが、当時は実感しなかった大きな心の穴ともいべきものを泌々と実感させられるきょうこの頃である。

蒲生さんの卒業年度は私よりも2年先輩であるが、広島医科大学や都立大学助手を経た後にわが政治経済学部へ専任講師として就任されたので、就任順においては、一応私のほうが先任ということになっている。最初のうちは専門が違うのであまり親しいおつきあいでなかったが、白石四郎教授が学部長をやられた当時、蒲生さんは政治学科長、私は経済学科長としてコンビを組ませて頂いて以来、親密な御交際を願うようになった。私も「素面のときには」あまり喋舌のほうではないが、蒲生さんは飲酒していようがいまいが寡黙で、しかもそばにおられることによって何となく暖かさを感じさせられる人柄であった。この人柄と、物事を平穩に収拾しようとされる人格とが相俟って、蒲生さんの人望を高めていたように思われる。

学科長としてコンビを組んで頂いていた当時は、組合や、いわゆる民青的言動に対してかなり批判的・厳然たる態度をとっておられたが、教務部長に選出された頃から、人柄が円満になったというのか、寛容になったというのか、かなり変わられたように思う。同じく社会科学をやっている社会学と経済学の専攻分野ないしは土台の違いによるものかもしれないが、卒直にいて、私にとってそのような在り方については、違和感を感じさせられるようになってしまった。

寛容ということについて、先般「蒲生さんを偲ぶ会」のさいに「蒲生さんは大学はもっと寛容であるべきだと云っておられた」旨の発言があったが、大学は学問・研究の場であり、蒲生さんの言はそれについての自由・寛容を意味されたのだと思う。ところが「明大は寛容で住みよい」ということを屢々耳にす

るが、そのさいの寛容はむしろルーズに通ずるように思われる。というのは、教師としての職務を少々怠けても何もいわれない。研究の自由から行動の自由（それが他人の行動の自由を制約するものであっても）に及んでも干渉されないことが寛容であり、それについて批判や注意がなされると寛容でないというふうに感違いしている向きがあるからである。寛容をそのように解釈されると知ったら蒲生さんも苦笑しておられることだろう。

学部長としての蒲生さんはきわめて公平な態度を貫かれ、その有能さと結びついて、名学部長としての手腕をふるわれたことは衆目の認めるところである。在任中に不幸にも例の明高中問題が発生したが、教授会では余り論議されることはなかった。ただ他人のためにきわめていやな立場に立たされているということを間接に聞いて、お節介とは思いつながらも蒲生さんに「明高中入学問題は、一部で喧伝されるような不正入学とは考えられないから、教授会へ下駄をあずける形で処理されては…」と進言したことがあるが、けっきょくそのような処理をされることなく、身体上の都合を理由に辞任されてしまった。今でも理由のない辞任として残念でならない。

学問的な面については専門が違うので発言権はないが、私が学位論文を提出するさいに蒲生さんにも「一緒にいかがですか」とお誘いしたら、「10年も前なら提出しただろうが、今はもう提出する気になれない」といわれたことが今でも鮮明に思い出される。いろいろな意味に解釈できる言葉であるが、温厚な中にも学問的には厳しい、はっきりしたことをいわれる人だなという印象であった。しかしその後学界での活躍を仄聞するにつれ、その真意を漸く理解できるような気がしている。

最後に、学部長としての私は、前学部長としての蒲生さんからいろいろな御助言、御指導を頂いたことについて感謝の意を表しておきたい。いろいろな事例があったが、専教連問題で私が幹事長宛に出した文書について教授会が紛糾したさいに、わざわざ人を介して対処の仕方について温いアドバイスを頂いたことを特筆するにとどめておこう。

いづれにしても、非常に多元的な存在であった蒲生さんの逝去は、わが学部

のみならず明治大学，また学界にとっても大きな痛手というほかないが，われわれとしては蒲生さんの必を必として，学部ひいては大学のために，また学会のためにも己れの分限にあった努力を重ねることをお誓いして結びたい。